

(続紙 1)

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	大久保遥
論文題目	学校における困難な経験と問題の個人化過程：通信制高校を経由する成人期への移行とジェンダー		
(論文内容の要旨)			
本論文は、通信制高校を経由して学校から社会へと移行しようとしている若者に注目し、約50名にのぼる調査協力者から、通信制高校での学校経験のみならず、そこにいたるまでの義務制学校あるいは全日制高校での学校経験や生活史、また通信制高校卒業後の高等教育機関での学修経験、職業に移行してからの職場での人間関係や生活史などを詳細に聞き取り分析することを通じて、社会構造等に起因するさまざまな問題が個人化されたり隠蔽されたりして持ち越され、当事者のなかに累積されていく過程を明らかにしたものである。また本論文では特に女性協力者の語りの分析に力点が置かれ、女性がどのように学校、また社会の中で周辺化され排除されていくかについて重点的な分析・考察が行われた。 第1章では本論文の問題設定ならびに調査方法論が提示され、調査協力者が経由してきた通信制高校をめぐる近年の特徴として、サポート校の設置により「通学」が可能な通信制高校が広がっている点などの概況が説明された。 第2章では、通信制高校在学経験者からの聞き取りを手がかりに、女子グループからの排除が学校からの排除につながる過程を示した。先行研究で男性集団内の関係性は学業達成などの「業績主義」や「異性の獲得」といった比較的明確な基準によって変動すると仮説立てられるのに対して、女子グループからの排除は、その場の力学に応じて変わる「暗黙のルール」から逸脱する出来事が起点となって生じていた。さらにその女子グループからの排除は、学校文化に準拠的なルールや価値観が介在することで、協力者が経験した排除は「問題」として学校では表面化されず、学校からの排除へとつながる過程を示した。ここでは、女子同士の関係性の問題は、教師側が学校で「問題」として扱いにくい側面に加えて、当事者となる女性側も学校という構造のなかで「問題」とするに値しないという認識を持たされていることで、その構造が維持・再生産されている側面が見い出された。 第3章では、学校期における困難な経験が、子ども—教師間のリアリティ分離によって、子どもの主観的経験が学校で「問題」として表面化されないプロセスを明らかにした。ここでは、教師が学校文化において権力を持つことから、二つに分離されたリアリティで採用される経験は、学校文化に準拠点をもつ経験であることを指摘した。だからこそ、子どもが実際に直面しているリアリティは学校で採用されず、「問題」として表面化されないプロセスがみられた。その帰結として、協力者は教師とのかかわりの経験のなかで「大人って信用ならない」という認識を抱くことにもつながった。 第4章では、調査協力者らが消極的あるいは積極的に、個人の選択として通信制高校を			

いかなる論理で選んだかを示した。以上により、子どもが学校期に経験してきた困難は学校では表面化されず、調査協力者の側が教育の場で周辺化され、困難な経験に関連する問題は不可視化されたまま、通信制高校への入学へとつながっていったことを示した。

第5章では、通信制高校への「通学」する意味に焦点を当てた。協力者にとって通信制高校での生活は、これまでの困難な学校経験が部分的に書き換えられる側面があることを示した。具体的には、協力者は通信制高校入学前の学校において困難な経験に直面するなかで、「先生」や「学校」に対してネガティブなイメージを抱いていたが、通信制高校での先生とのかかわりや先生のサポートにより築いた友人関係のなかで、過去の負の経験から培われた認識を再解釈し、新たな関係を構築していた。さらにそれらを基盤として、学校生活を意味あるものとして再構築している姿がみられた。ここから通信制高校への「通学」は、これまでの負の学校経験が部分的に再構築されうる場であると結論づけた。

第6章では、通信制高校を経て大学に進学した者の大学生活を維持する実践を検討し、大学進学は人生のゴールではなく、かつての困難が保持された状態で大学生となる過程が示された。これまでの学校生活において様々な困難に直面してきた協力者は、過去を再帰的にふりかえる「自己モニタリング」を通じて、大学生活の維持を目的として生み出された「克服しない」戦略のもとで大学生となっていた。具体的には、自身の活動に「ブレーキ」をかけること、同輩集団から距離をとること、フォーマルな社会資源を活用することといった実践がみられた。対照的に、これまでの苦手や困難を克服しようとした者においては、大学生活の維持が難しくなることがうかがえた。

第7章では、被虐待と貧困という複数の困難を経験してきた女性を対象に検討した。両者はいずれも通信制高校入学前に、自身の困難な経験が表面化されないまま周辺に追いやられることを経験していた。近年のジェンダー・フェミニズム研究では、母親の「ケア」役割に着目してきたが、2名の女性が子どもから成人期への移行過程のなかで、母親や他の家族に対する語りから自らの「ケア」責任を引き受ける論理がみてとれた。結果として、彼女たちが成人期になるにつれ、家族内の労働力とケア役割といった多重の役割を担うようになった。ここから、通信制高校を経由する高校生活において、自らの人生については自己責任として学費を自費でやりくりし、社会への移行と同時に家族内の多重な役割を引き受けるように水路づけられていることが明らかとなった。

最後に結論の章で、問題を個人化する学校の文化構造、教師—生徒といった権力関係に内在する権力性とジェンダー秩序の問題、家族関係のしがらみ、階級とジェンダーの維持・再生産等について検討が加えられ、アイリス・マリオン・ヤングの構造的不正義の概念が本論文全体の主張と共鳴するものであることが指摘されて論文が締めくくられた。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、通信制高校を経由して学校から社会へと移行しようとしている若者に注目し、約50名にのぼる調査協力者から、通信制高校での学校経験のみならず、そこにいたるまでの義務制学校あるいは全日制高校での学校経験や生活史、また通信制高校卒業後の高等教育機関での学修経験、職業に移行してからの職場での人間関係や生活史などを詳細に聞き取り分析することを通じて、社会構造等に起因するさまざまな問題が個人化されたり隠蔽されたりして持ち越され、当事者のなかに累積されていく過程を明らかにしたものである。また本論文では特に女性協力者の語りの分析に力点が置かれ、女性がどのように学校、また社会の中で周辺化され排除されていくかについて重点的な分析・考察が行われた。教育社会学および関連領域における本論文の意義は以下の4点にまとめることができる。

第一に、本論文がただ単に通信制高校の包摂的機能を描写したのみならず、通信制高校在学に前後する経験にまで広げた生活史を丁寧に聞き取り、通信制高校入学・編入学前の小・中学校時代の不登校やそれにつながる経験の諸相、特にそれが学校によって十分に問題化されず不可視化されてしまうケースが多いこと、そしてそうした負の学校経験が、通信制高校での出会いの中で部分的に書き換えられていく経緯を詳細に明らかにした点が評価される。近年、通信制高校は学校数や生徒数が著しく増え、セイフティネットとしての役割や包摂機能に関する研究が増えている。しかしそれらの研究の多くは、視野が通信制高校内部に限定され、生徒のライフコースを視野に入れたものはほとんど存在しない。本論文はその限界を克服し、通信制高校が単に進学や就職のサポートをしているだけでなく、負の経験の相対化や書き換えによるエンパワメント機能を持つことを明らかにした。

第二に、通信制高校のような多様な選択肢ができることで、社会構造的要因に起因するさまざまな困難や社会問題がかえって個人化され、表面化されることなく隠蔽される可能性が広がっているという逆説に光をあて、当事者のライフコースに即してこの逆説の様相を描いた点が評価される。後期近代社会は個人によるライフイベントの自己選択が強調される再帰性を特徴とするが、本論文は教育社会学の領域においてこの逆説とその帰結を描いたものと位置づけることができる。たとえば第3章において、物を盗られるいじめの被害にあった経験をもつ生徒が、学校側の対応の中で個人の忘れ癖や怠惰という性格の問題に帰着させられ、問題が表面化せず不登校に結びついていった過程が、リアリティ分離の概念に拠って分析されていた。これはいじめの多くがなぜ不可視なのかという問題に迫る有益な知見を提供するものであり、教育社会学におけるいじめ研究への寄与を示すものである。

第三に、通信制高校を経由した成人期への移行にジェンダーの視点を交差させ、

女子が経験する周辺化や貧困化といった移行過程にジェンダーという要素が及ぼす影響を、縦断的視点によって明らかにした点が評価される。特に第2章では、通信制高校に行き着くまでの学校経験に関する生活史調査から、周辺化の背後にある女子グループからの排除という経験の重要性を浮き彫りにした。排除に際してグループメンバーが参照する価値規範に注目し、それらが支配的な（つまり男性中心的な）学校文化と親和的であったとする知見は極めて興味深いものであった。

第四に、通信制高校が、負の学校経験をした者の受け皿という文脈での消極的選択のみならず、進路実現を果たすための有効で合理的な手段でもあったという意味で積極的選択の対象でもあったことを明らかにし、一枚岩ではない通信制高校生徒像を提示した点が評価できる。第4章において、通信制高校経由者が「やりたいこと」から将来の夢を考える社会規範に従って進路選択をしている点、あるいは通信制高校が大学進学という上位トラックに参入するための媒介装置となっている点が明らかにされた。また第5章では、通信制高校入学者の中に、通学することや人間関係を拒んでいるわけではなく、環境さえ整えば学校に通いたいと考えている者が相当数いることが浮き彫りにされた。これらの知見は新たな通信制高校像につながる興味深いものである。

他方で本論文について、いくつかの問題点が指摘された。副題にジェンダーというキーワードを挙げながらも、女性の排除をめぐる理論的議論が不足している点、男性協力者からの聞き取りデータの活用が十分行われていない点が指摘された。また結論部における構造的不正義の概念によるまとめに関連して、政策・制度的改善の可能性を排除すべきではないという指摘、また構造的不正義を生む構造の分析が今後必要ではないかという指摘がなされた。さらにデータの使い方について、各章とも数名ずつの協力者の語りがピックアップされている一方で、50名の語りの全体からトータルに導出される知見が見えづらいという指摘、ジェンダー以外に階級もしくは階層という構造的視点が必要ではないかという指摘がなされた。しかしこれらの問題点は本論文の今後の課題であることを著者も十分理解しており、本論文の価値を下げるものではない。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和7年1月14日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降